Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-18

看護学生の自己イメージと看護婦イメージの変化に関する一考察

祖父江，育子
渡辺，和子
木下，功

(Citation)
神戸大学医療技術短期大学部紀要,4:125-132

(Issue Date)
1988

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/80070081

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/80070081

看護学生の自己イメージと看護婦イメージの変化に関する一考察

祖父江　育　子，渡　辺　和　子，木　下　　功

はじめに

看護学生が，看護婦という職業に適応し成長していく過程は重要であり，それについては多数の研究がある。筆者らは，人間の成長のプロセスについて，学生が学校での教育を終え，実社会に出て職務を果たすなかで，自分自身を成長させていくのであると考えており，学生が主体的に自分自身を看護婦として意味づけ，成長させていく過程と成長を促す要因とはなにかについて調査し，研究を行ってきた。前回の研究ではイメージに着目し，Osgood[1]が開発したSemantic Differential Method（以下，SD法と略す）を用いて，短大での教育期間中の自己イメージと看護婦イメージに着目し，本学の学生は，自分について，また看護婦についてどのようなイメージを抱いているのかについて研究を行った。

今回は，短大での教育や友達との交流を通じての経験によって，それらのイメージが，1年間にどのように変化したかを調査し分析したので，考察を加え報告する。

対象と方法

研究の対象は，本短期大学部看護学科第5期生81名で，有効回答数は，55（67.9%）であった。

研究材料は，前回と同様，石塚ら[2]の用いたSD法の尺度18対である（表1）。

調査は，第1回目1987年7月13日，第2回目1988年7月4日に，アンケート方式で実施した。

表1　イメージ尺度の構成

	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
	7	6	5	4	3	2	1	
A	面白い							つまらない
B	活気のある							活気のない
C	安定した							不安定な
D	労の多い							楽な
E	好きな							嫌いな
F	若々しい							年寄りじみた
G	親しみやすい							親しみにくい
H	スマートな							ヤボな
I	価値のある							価値のない
J	理性的な							感情的な
K	明るい							暗い
L	重要な							重要でない
M	責任感の強い							無責任な
N	なりたい							なりたくない
O	望みのある							望みのない
P	特色のある							特色のない
Q	温かい							冷たい
R	自由な							きゅうくつな

結　　果

18対のSD法の尺度は，表1に示した。それぞれの尺度（面白い―つまらないなど）に7点から1点の得点を与え，各尺度について，各イメージ（2年次自己イメージ，2年次看護婦イメージ，3年次自己イメージ，3年次看護婦イメージ）毎に，各群（全対象者群，自己イメージが有意に高くなった群，自己イメージ・看護

神戸大学医療技術短期大学部
School of Allied Medical Sciences, Kobe University
1988年7月30日受付，同年9月28日受理

表2　イメージの尺度別変化

n=55

	自己イメージ							看護婦イメージ						
スケール	2年次			3年次				2年次			3年次			
	$\bar{X}$	SD	CV	$\bar{X}$	SD	CV		$\bar{X}$	SD	CV	$\bar{X}$	SD	CV	
A	4.29	1.17	27.3	4.13	1.16	28.1		4.96	0.92	18.5	4.58	1.15	25.1	*
B	4.49	1.39	31.0	4.29	1.21	28.2		5.73	0.80	14.0	5.33	0.96	18.0	*
C	4.15	1.30	31.3	3.69	1.20	32.5	*	5.15	1.16	22.5	4.80	1.08	22.5	
D	4.09	1.24	30.3	4.24	1.22	28.8		6.20	0.78	11.8	5.64	1.32	23.4	**
E	3.73	1.18	31.6	3.71	1.13	30.5		5.16	0.94	18.2	4.36	0.95	21.8	**
F	4.31	1.15	26.7	4.04	1.37	33.9		5.10	1.08	21.2	4.78	1.05	22.0	*
G	4.56	1.20	26.3	4.22	1.03	24.4	*	5.07	1.25	24.6	4.29	1.26	29.4	**
H	3.69	0.92	24.9	3.73	0.93	24.9		4.78	0.99	20.7	4.40	1.01	23.0	*
I	4.02	0.87	21.6	3.95	0.78	19.7		4.00	0.73	18.3	5.78	0.96	16.6	**
J	3.67	1.38	37.6	3.27	1.33	40.8		5.18	1.02	19.7	5.27	1.04	19.7	
K	4.60	1.29	28.0	4.47	1.30	29.1		5.07	1.12	22.1	4.73	1.13	23.9	
L	4.20	0.76	18.1	3.80	0.80	21.1	**	6.15	1.06	17.2	5.82	0.94	16.2	
M	4.91	1.01	20.6	4.53	0.98	21.6	*	6.40	0.97	15.2	6.04	0.69	11.4	*
N	4.25	1.11	21.6	3.67	1.17	31.9	**	5.51	1.07	19.4	4.55	1.14	25.1	**
O	4.67	1.14	24.4	4.35	1.04	23.9		5.67	0.97	17.1	5.12	0.83	16.2	**
P	4.27	1.35	31.6	4.53	1.10	24.3		5.60	1.27	22.7	5.16	1.58	30.6	
Q	4.45	1.17	26.3	4.36	1.22	28.0		5.85	0.93	15.9	4.67	1.26	30.0	**
R	4.45	1.37	30.8	4.31	1.33	30.9		3.55	1.05	29.6	3.51	1.07	30.5	

*　$p<0.05$　　**　$p<0.01$

婦イメージとも有意に低下した群）毎に整理し，その平均得点（$\overline{X}$），標準偏差（SD）と変動係数(CV）を求めた（表２，４）。表２にそれぞれのイメージの尺度別結果を示した。自己イメージにおいては，２年次から３年次の一年間で，「安定した―不安定な」，「親しみやすい―親しみにくい」，「重要な―重要でない」，「責任感の強い―無責任な」，「なりたい―なりたくない」の５尺度が有意に低くなっていた。看護婦イメージも，２年次から３年次で「面白い―つまらない」，「活気のある―活気のない」など11尺度が有意に低くなっていた。しかし，「価値のある―価値のない」は，4.00から5.78と有意に高くなっていた。全尺度の平均値では，自己イメージ，看護婦イメージとも３年次が有意に低かった。　対象者の２年次自己イメージ，看護婦イメージと３年次自己イメージ，看護婦イメージの概念間の変化を明らかにするため，Distant Score（以下，D値と略す）を求め，その結果を表３に示した。２年次と３年次間の自己イメージのD値が最も少なく1.23であり，最も大きいのは３年次の自己イメージと２年次の看護婦イメージの間のD値6.00であった。２年次と３年次の自己イメージ間のD値と，２年次と３年次の看護婦イメージ間のD値との間には，有意差が認められた（p<.05)。２年次の自己イメージと看護婦イメージ間のD値と，３年次の自己イメージと看護婦イメージ間のD値の間には，有意差は認められなかった（p>.05)。

２年次から３年次でイメージが有意に変化した対象者をまとめてみると，自己イメージが有意に変化したのは18名（32.7%）で，そのうちイメージがポジティブに変化したのは６名（10.9%），ネガティブに変化したのは12名（21.8%）であった。看護婦イメージが，有意にネガティブになったのは22名（40.0%）で，

表３　イメージの Distant Score

n=55

学　年	イメージ	２年次		３年次	
		S	N	S	N
２年次	S				
	N	5.22			
３年次	S	1.23	6.00		
	N	4.04	2.93	4.71	

S：自己イメージ
N：看護婦イメージ

表４　イメージの群別変化

イ　メ　ー　ジ	年次	全対象者群 n=55		自己イメージが有意に高くなった群 n=6		自己イメージ・看護イメージとも有意に低下した群n=7	
		$\overline{X}$	SD	$\overline{X}$	SD	$\overline{X}$	SD
自己イメージ	2	a 4.27	0.34	e 3.59	0.45	i 4.83	0.62
	3	b 4.07	0.36	f 4.53	0.47	j 3.82	0.42
看護婦イメージ	2	c 5.29	0.72	g 5.13	0.70	k 5.91	0.67
	3	d 4.94	0.63	h 5.03	0.75	l 5.01	0.76

p<0.01　a-b, a-e, a-i, b-f, b-j, c-k, e-i, e-f, f-j, g-k, i-j, k-l,　　p<0.05　c-d

ポジティブになった対象者はいなかった。自己イメージ，看護婦イメージとも有意にネガティブになったのは7名（12.7%）であった。

表4，図1に自己イメージが有意に高くなった群，自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低くなった群，全対象者群，の自己イメージ・看護婦イメージの変化を示した。2年次の自己イメージをみると自己イメージが有意に上昇した群と自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低下した群，自己イメージが有意に上昇した群と全対象者群，自己イメージ，看護婦イメージとも有意に低下した群と全対象者群との間には，t検定でそれぞれ有意差が認められた。3年次も同様であり，2年次で最も低かった自己イメージが有意に上昇した群は3年次では最もポジティブなイメージを示した。また，自己イメージが有意に上昇した群，自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低下した群，全対象者群の自己イメージとも2年次から3年次にかけて有意に変化していた。

2年次の看護婦イメージは，t検定の結果，自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低下した群が有意にポジティブであったが，自己イメージが有意に上昇した群と全対象者群間に有意差はなかった。3年次の看護婦イメージは，自己イメージが有意に上昇した群，自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低下した群，全対象者群の3群とも有意差がなかった。2年次から3年次の看護婦イメージで有意に低くならなかったのは，自己イメージが有意に上昇した群のみであった。

考　　察

1．全対象者群について

表2．3に示すように2年次と3年次の自己

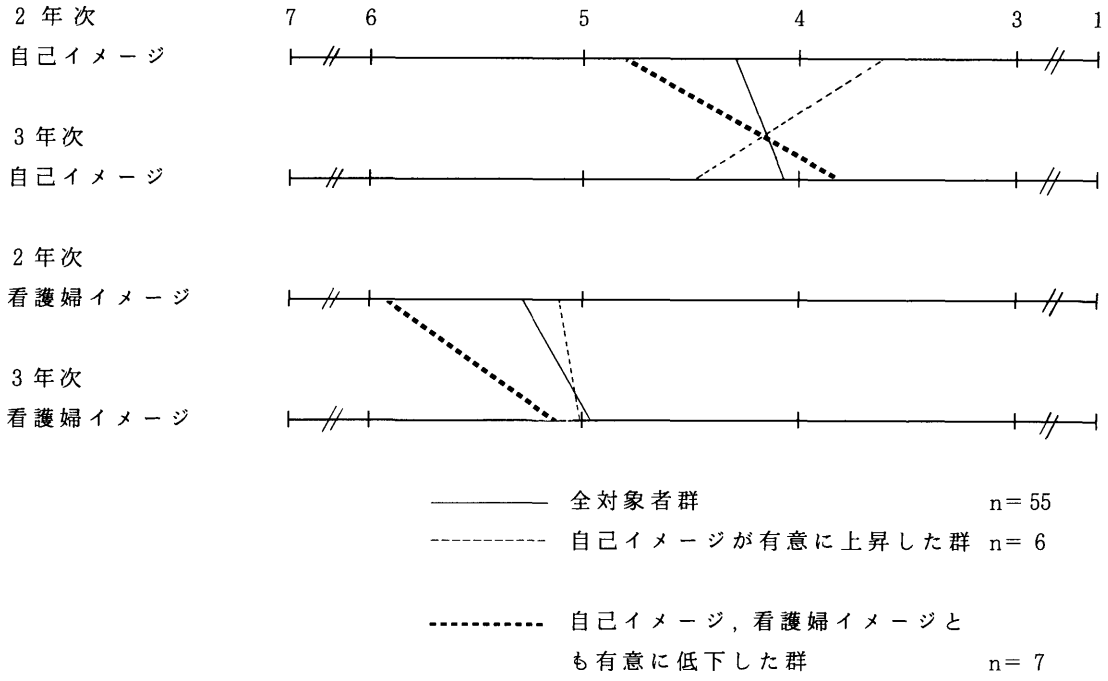

図1　SDスケール上のイメージの群別変化

イメージのD値は1.23で，3年次の自己イメージは2年次の自己イメージより有意に低い。2年次と3年次の看護婦イメージのD値は2.93で，3年次の看護婦イメージは2年次より有意に低い。自己イメージ間と看護婦イメージ間のD値についてt検定を行ったところ有意差が認められた。尺度別変化をみると，自己イメージで有意に低くなった尺度は，「安定した―不安定な」など5尺度であった。看護婦イメージは，「面白い―つまらない」など11尺度で有意に低くなっていたが，「価値のある―価値のない」のみ有意に高くなっていた。

この結果から，2年次から3年次の一年間で学生の自己イメージと看護婦イメージは有意に低下し，とくに看護婦イメージは大きく低下したといえる。石塚[3]の報告でも，看護学生の入学当初から1年間の看護婦イメージは有意に低くなっており，とくに個人的好意は大きく低くなっていた。上泉[4]らは，新規採用看護婦と在職者，退職者を対象に自己イメージ，看護婦イメージについて調査している。新規採用看護婦は，採用後6ケ月で，自己イメージ，看護婦イメージともに低下していた。これらの結果からも，看護婦イメージは現実を認識したことで低くなったと考えられる。我々の対象者は臨床実習を経験し，石塚の対象者は看護学を学び，上泉らの対象者は実際に看護婦として働く，という現実にそれぞれ直面している。

学生が，「仕事を通じての自分自身をどのような形で現実にマッチさせていこうとするか[5]」で進路選択したのであれば，将来の仕事はかなり学生自身の理想像と一致していると考えられる。石原[6]は，職業イメージと自己の現実像，理想像について職業同一性達成群，早期完了群，モラトリアム群，同一生拡散群の4群に分類し研究を行っている。そして職業同一性達成群と早期完了群は，理想像とつきたい職業イメージとが現実像より接近していると報告している。我々の調査ではこの点について十分な結果を得られなかった。しかし，学生は看護職者になるという目的をもって入学していることから，どちらかといえば職業同一性達成群や早期完了群に属していると考えられる。このことからも2年次の看護婦イメージは自己の理想的職業イメージを反映したものと考えられる。そして，実習の場で，現実の看護婦についてより多くの知識を得るとともに，経験を重ね，より現実的に理解した結果，3年次では看護婦を有意に価値があると認めながらも，よりネガティブにイメージしたといえよう。また，学生は実習のあらゆる場面で看護実践者である自分自身とも直面する。3年次の学生は，理想の自己と現実の自己に悩み，自己をより不安定で重要でないようにイメージしたため，看護婦イメージがより低くなったのかもしれない。今川[7]らは，SD法を用いて測定した結果，自己についての認知構造が理想の自己についての認知構造より安定しており基本的であると結論している。自己が不安定になったとき，自己の関係する看護婦イメージがより大きく変動するのは当然と考える。

2．自己イメージ・看護婦イメージが有意に変化した群について

表3に示すように2年次と3年次の自己イメージのD値は，1.23と小さい。しかし，表2に示すように尺度別自己イメージでは，2年次と3年次間に有意差があり，それぞれの変動係数も看護婦イメージに比べて大きく，ばらつきの大きいことがわかった。表4の個人別イメージ変化が示すように，2年次から3年次にかけて自己イメージが有意に高くなったのは6名で，低くなったのは12名であった。自己イメージが有意に低くなったもので，看護婦イメージも有意に低くなったのは7名だった。2年次に最もネガティブであった自己イメージが有意に上昇した群は，3年次に最もポジティブに自己を評価していた。自己イメージ，看護婦イメージともにポジティブに評価していた自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低下した群は，最もネガティブな評価となり，ちょうど逆転した結果を示した。尺度別にみると，自己イメージが有意に上昇した群は，「温かい―冷たい」などの情緒的意味の尺度が有意に高くなり，自己イメー

ジ・看護婦イメージとも有意に低下した群は，「安定した―不安定な」などの社会的態度を測定していると考えられる尺度が有意に低くなっていた。

看護婦イメージでは，有意に低くなったのは，自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低下した群，全対象者群であった。2年次に最もネガティブであった自己イメージが有意に上昇した群は，有意に低下しなかった。3年次の看護婦イメージは，自己イメージが有意に上昇した群（5.03），自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低下した群（5.01），全対象者群（4.94）の3群とも近似値を示し，それぞれの群間でt検定を行った結果，有意差は認められなかった。尺度別の結果では，2年次から3年次にかけて，自己イメージが有意に上昇した群は，「責任感の強い―無責任な」のみ有意にネガティブになっていた。自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低下した群は，全対象者群で有意に高くなった尺度「価値のある―価値のない」も有意にネガティブになっており，合計9尺度が有意に低くなっていた。

これらの結果から，自己イメージが有意にネガティブになった2群は看護婦イメージも有意に低くなったが，自己イメージが有意にポジティブになった群の看護婦イメージは有意にネガティブにならなかったといえる。また，3年次の看護婦イメージは，3群とも同じ程度の値であった。

2年次の看護婦イメージは，3群ともそれぞれ自己イメージにそってポジティブに位置している。これは，2年次の調査期間が基礎看護実習の前であり，学生のいだく看護婦イメージが自己の理想像を反映していたからだと考えられる。2年次に最もポジティブであった自己イメージ・看護婦イメージとも有意に低下した群の自己イメージは，3年次には全対象者群のそれよりも有意に低くなっていた。しかし，2群の看護婦イメージは，イメージの平均値が接近し，有意な差は認められなかった。学生の看護婦イメージが実際の看護婦と自分の理想である看護婦をあわせたものであれば，これは当然の結果といえる。自己イメージがポジティブな学生ほど高い看護婦イメージをもち，現実とのずれは大きくなる。その結果，学生が現実と理想の間で不適応をおこすことはよく知られている。上泉[8]らは，退職者の看護婦イメージが採用時から徐々に低下し，退職時には自己イメージが勤務する病院の看護婦イメージよりポジティブになったと報告している。また Farabaugh[9]は，学生が学校教育のなかで理想の看護婦だけでなく，現実の看護婦についてもよく理解することが重要であり，理想と現実のずれからくる不適応を防止することが可能であると述べている。学生は臨床実習で現実の看護婦と接するだけではない。学生は理想に描いていた看護婦と自分自身の能力のギャップに気づき，不適応をさけるため現実的な解決方法として，看護婦イメージを低下させたのかもしれない。

自己イメージ，看護婦イメージとも有意に低下したとはいえ，なお3年次の看護婦イメージは自己イメージよりも有意に高く，「自由な―きゅうくつな」の尺度以外すべての尺度でポジティブであった。この点からも学生は看護婦になることに違和感を抱いていないと推測できる。

自己イメージが有意に高くなった群の自己イメージは，「明るい―暗い」など6尺度が有意に高くなっていた。看護婦イメージは，ほとんど低下せず有意差はなかった。これは自己イメージが有意に上昇したためと考える。自己イメージが高くなった学生は，理想の看護婦と自分自身とのギャップが縮まるので，看護婦イメージを低くして，現実に適応しなくてもよいといえる。村井[10]も，学生の自己イメージと看護行為を実施しているときの学生自身のイメージは，同じ傾向を示すと報告している。現実の看護婦イメージが低くなっても，学生は高くなった自己イメージを基盤にして自分自身の看護婦イメージをつくりあげていくため，看護婦イメージは有意に低くならなかったと考えられる。

ま　と　め

今回，看護学生を対象に，2年次から3年次の自己イメージ，看護婦イメージの変化を調査した。結果は以下のとおりである。

1．学生の自己イメージは看護婦イメージよりも有意に低かった。
2．学生の自己イメージと看護婦イメージは，2年次から3年次の1年間で有意に低くなった。
3．2年次から3年次の1年間で自己イメージが有意に高くなった学生の一群（11%）があり，この群では，看護婦イメージは有意に低下しなかった。

Holleran[11]や中西[12]は，学生が看護婦として成長するためには，学生自身が1人の個人として成長することが不可欠だとのべており，筆者らの調査でこれを支持する結果を得た。

文　　献

1．Osgood, CE, Suci, GL, Tannenbaum, PF : The measurement of meaning. Illinois 1957
2．石塚百合子，白佐俊憲，木村泰子：看護婦イメージの研究　看護教育　23：446，1982
3．石塚百合子：看護学生の看護婦のイメージの研究―1年終了時のイメージの変化－日本看護科学会誌　7：96，1987
4．上泉和子，井部俊子，内田卿子：聖路加国際病院における看護婦の期待，イメージの変化と離職との関係について　日本看護科学会誌　6：86，1986
5．梶田　一：子どもの自己概念と教育　東京大学出版会　1985
6．石原敏道：職業同一性の研究　山形大学紀要　人文科学　10：477，1985
7．今川民雄，藤川和男：パーソナリティ認知の追跡的研究(2)―自己像と理想の自己像をめぐって―　北海道教育大学紀要C　教育科学編　36：47，1986
8．4．と同著
9．Farabaugh, N : Do Nurse Educators Promote Burnout ? International Nursing Review 31 : 46, 1984
10．村井静子：小児看護実習における学生と母親の看護行為を媒体とした対人関係―イメージ調査からの考察―　日本看護科学会誌　4：42，1984
11．Holleran，C : Nurses as a Social Force. International Nursing Review 32 : 14, 1985
12．中西睦子：看護教育と文化的基盤　看護教育　28：6，1987

A Research on the Changes of "Self-Image" and "Nurse-Image" of the Nursing Students

Ikuko Sobue, Kazuko Watanabe and Isao Kinoshita

ABSTRACT : In the previous study (VOL 3, Kobe Itan Kiyou), the authors surveyed "self-image" and "nurse-image" of the 37 nursing students in the 3 rd grade of this school by the use of the Semantic Differential Method composed of 18 scales. In this study, the authors used the same method to the 3 rd-year-nursing students in 1988 and examined the changes of those images in the course of one year.

The following is the result we obtained through the S.D.M.

1. The "self-image" and "nurse-image" of all 55 students in the 3 rd grade changed more negatively than those in their 2 nd grade. The difference was significant.
2. The "self-image" became more significantly positive in 6 students within one year, but their "nurse-images" did not change more negatively within one year.
3. Both "self-and nurse-image" showed further negative change within one year with statistical significance in 7 students.
4. In all 55 students including 2 nd and 3 rd grades, the scores of "nurse-image" were significantly greater than those of "self-image".
5. The change of "nurse-image" was greater than the change of "self-image" within one year.

Key Word : Self-image,
Nurse-image,
Semantic differential method,
Nursing students.

School of Allied Medical Sciences, Kobe University